

ART KISS LETTER

[アート・キッスレター]

FOR KUMAMOTO ART PEOPLE

Contemporary Art Museum, Kumamoto

熊本市現代美術館発行 <http://www.camk.or.jp>

vol.49

FREE

AUTUMN
[2010.秋号]



ザビーネ・ビットナーさん



ヴァルター・サイデルさん



モニカ・ファーバーさん

「古屋誠一 メモワール」展、「サイコアナリシス—現代オーストリアの眼差し—」展が開催中です

オープニングには、オーストリア大使館文化担当参事官オーストリア文化フォーラム代表のミヒャエル・ハイターさん、出品作家のザビーネ・ビットナーさんより祝辞とごあいさつをいただき、オーストリアと熊本の今後の文化交流を祝う華やかな会となりました。展覧会初日には、サイコアナリシス展のキュレーターの一ひとり、ヴァルター・サイデルさんによる講演会「Artistic Models of Psychic Reality Conditions (心理学的リアリティーの状態における芸術的範例のいくつか)」がおこなわれ、展覧会出品作品を通じて、建築物がその間で生きる人間にどのような心理的效果を与え、その効果をアーティストがどのように作品を通じて顕在化させ、どのような意図をそこに込めているかという内容を講演いただきました。翌日曜日には、出品作家古屋誠一氏を最もよく知るモニカ・ファーバー（アルベルティナ美術館写真部門チーフキュレーター）さんによる講演会「Furuya's Memories, again (古屋誠一「メモワール」、再び)」が開催され、古屋のオーストリアでの活動と、オーストリア写真文化の深い関連性について講演いただきました。現代のヴィヴィッドなオーストリアというものを深く意識させる両講演会でした。(H.T)

巻頭言

「海を疾(は)しる花火」

熊本市現代美術館館長 桜井武

静かな暗黒の海で開催された花火大会「不知火 海の祭り2010」(9月11日)を見る機会を得た。それは、豪華絢爛、破格の仕掛けがあり、圧倒的なイベントであった。打ち上げ数こそ1千5百発で、数千から一万発を誇る他所の大会に比べれば数こそ多くはない。しかし、海という舞台、通常の天上に開花する大玉はもちろんのこと、人の視線で水平にダイナミックに移動していく巨大な火花は際立って美しく、希有の造形美とすることができる。暗闇の海に青い光を放って疾走する小船が、海面に次々に火花をしかけ、数秒の時差で、左から右へと鮮烈な一大ページェントが繰り広げられる。一瞬、観客は火と色彩と音響の強烈な世界に飲み込まれた錯覚を持つ。直後に黒く限りなく深い夜空が訪れ、それは上質の演劇体験に近いものであった。この花火大会は、日本書紀に記されている不知火伝説に由来する催事で、八朔日(旧暦8月1日)前後に行われる。また熊本県には八朔まつわる催しとしてもうひとつ、山都町の八朔祭りがあり、その大造り物は有名。こちらも9月初旬に行われる伝統的な祭りである。大規模な造り物の素材は野や山や川で集められ、住民に引き継がれてきた表現力と技巧には目を見張るものがある。とりわけ本年度の祭り(9月5日)は、各々の造り物が甲乙つけがたく、圧巻であった。猛暑が続いた9月、熊本の山間と海辺で行われた、造形性が際立つふたつの壮麗な祭りであった。

熊本県現代美術館の活動

MUSEUM INFORMATION

「小泉八雲生誕 160 年記念・来日 120 年記念 へるんさんの秘めごと」展 記念講演会

第 1 回 「小泉八雲と現代日本アーティストに共通する視点について」

2010.7.4

「小泉八雲 生誕 160 年記念・来日 120 年記念展 へるんさんの秘めごと」の連続講演会第 1 回目として、展覧会企画学芸員の富澤による講演会「小泉八雲と現代日本アーティストに共通する視点について」が行われました。現代美術館という場での小泉八雲に関する展覧会を開催するまでの思考の道筋、展覧会名「へるんさんの秘めごと」に込めた想い、小泉八雲と展覧会関連事業と展覧会内容についての関係性を語りつつ、展覧会出品作家選定理由に小泉八雲の著作やエッセーなどが深く関わっていること、その出品作家たちの魅力についてご紹介しました。(H.T)

【参加人数：70 人】



第 2 回 「小泉八雲を現代に生かす」

2010.7.11

ラフカディオ・ハーンの曾孫にあたる小泉凡さんをお迎えして講演会を行いました。前半は、これまで小泉さんが訪れてきたハーンゆかりの土地や文化を紹介するとともに、八雲の様々な側面についてご紹介いただきました。後半では、「小泉八雲を現代に生かす」というテーマで、防災、共生、教育、五感力、文化資源の 5 つの柱で論が展開されました。小泉八雲が伝えた、もの見方や考え方が現代社会のあらゆる場面でよりよく生かされているという事実が深く心に残るお話でした。(M.O)

【参加人数：80 人】



第 3 回 「ラフカディオ・ハーンのクレオール文化について」

2010.7.18

「へるんさんの秘めごと」展連続講演会第三回目は、熊本大学名誉教授西川盛雄先生にハーンとクレオール文化についてお話しいただきました。クレオールという混淆の文化、民族、言語について丁寧に紐解きつつ、ハーンとの関連を論じられました。ハーンの小説「ユーマ」をとりあげ、ハーンが身を置いた西インド諸島の歴史的・社会的文脈に言及しながら、ハーンの小説の特質に迫ります。また、「怪談」に見られるような超自然的なものへの興味や、クレオール的な構図の二焦点モデルのなかに生きた人としてのハーンへの言及、クレオール幻想というテーマで西川先生が作られた短歌の朗読もあり、充実した内容の講演となりました。(M.F)

【参加人数：80 人】



第 4 回 「小泉八雲のマンガ 一再話する『へるんさん』を再話する一」

2010.7.25

「へるんさんの秘めごと」展連続講演会、第 4 回目は、熊本大学准教授の跡上史郎先生に「小泉八雲のマンガ」と題してお話しいただきました。小泉八雲とサブカルチャーの接点を探るため、小泉八雲を主人公にした二つのタイプの漫画——一方は実証的で史実を分かりやすく伝え、一方は誇張や創作を入れつつ物語性を豊かにしていく——を比較しながら、同時に八雲自身の再話の態度についても論じられました。八雲自身はどちらかといえばお話しがより面白くなるように再話していくタイプの人物。その再話の方法や、また隻眼であったことなどの八雲の特徴などからサブカルチャーとも近い存在としての八雲の姿を浮かび上がらせていきます。小泉八雲とマンガという一見かけ離れたものについて明快な論旨で論じたとても興味深い講演に会場の方々も聞き入っていました。(M.F)

【参加人数：80 人】



第 5 回 「小泉八雲と日本の技芸 一富山大学ヘルン文庫を手がかりに」

2010.8.1

「へるんさんの秘めごと」展連続講演会、第 5 回目は、富山大学准教授の大熊敏之先生にお話しいただきました。富山大学図書館は、小泉八雲旧蔵の書籍コレクション「ヘルン文庫」を所蔵しています。今回の講演では、近代の日欧美術交流史、および近代工芸を専門とする視野から、「ヘルン文庫」から読み取れる小泉八雲自身の当時の工芸や芸術に関する興味の方向性やその近代的視野の限界に対する全く新しい検証を展開されました。「美術や高級工芸の枠組みから外された視覚造型表現、例えば細工、置物、つくりもの、さらには盆栽だとか鑑賞石だとか日本庭園、箱庭、いけばな、果ては造花、氷彫刻、工芸菓子。これらが、今の私が本当に興味を持って研究している対象なのです。」という、確かな研究実績をベースとされたうえでその視野の広さで、ユーモアを交えて楽しくお話されるあつという間の 1 時間 30 分でした。(H.T)

【参加人数：50 人】



*すべての講演内容は、「小泉八雲 生誕 160 年記念・来日 120 年記念展 へるんさんの秘めごと」報告書に記載予定です。

夏休み企画「おばけを描こう」ワークショップ開催しました

2010.8.7

「へるんさんの秘めごと」展出品作家の秀島由己男さんを講師にお迎えして、「おばけを描こう」ワークショップを開催しました。小泉八雲の物語を事前に読んで予習してきた子供達、展覧会をみて、アイデアをさらにふくらませてからいざ本番です。秀島先生のアドバイスも受けながら、みそ汁お化けや、文房具のお化け、閻魔様の娘など、ユーモアあふれる作品が完成。8/8-8/26 まで館内で展示しました。(M.O)

【参加人数：19 人】



フィルム上映会 「怪談」

2010.8.8

「へるんさんの秘めごと」展関連イベントとしてフィルム上映会を開催しました。上映作品は「怪談」、「雪女」「耳なし芳一」「茶碗の中」など3時間を超える作品にも関わらず、子どもからお年寄りまで幅広い年齢層のみなさんに涼しんでいただけようです。(EZ)
【参加人数：120人】



第7回お話し玉手箱ライブ開催

2010.7.17

RKK ラジオで毎週月曜日の夜にお送りしている朗読番組「お話し玉手箱」を生(LIVE)でお届けするお話し玉手箱LIVEも第7回目となりました。今回は、同時期にCAMK(熊本市現代美術館)で開催していた「へるんさんの秘めごと」展にあわせて、小泉八雲(Lafcadio Hearn)の「耳なし芳一の話」と「雪女」の二作品の朗読が行われました。日本の昔話として有名な「耳なし芳一」や「雪女」。実は、一般的に知られているストーリーは、小泉八雲が妻・セツより聞いたお話しを再話したものが基となっています。聞き語りのなかから生まれたものだからこそ「朗読」との相性は抜群！BGMも相まって、臨場感溢れる語りは迫力満点でした。不気味で冷たいながら、どこか優しさも滲ませた声、演技は、人間に恋した雪女にぴったり。「耳なし芳一」では、聴衆を飽きさせない緩急ある語り、真に迫る演技が、会場を魅了します。来場いただいた110名のお客様も、じっと話に聞き入っていました。(MF)
【参加人数：110人】



ミュージック・ウェーブ No.037 No.038

2010.8.13&9.25

熊本市わくわくプロジェクト協働事業 No.037 国本武春浪曲コンサート

2010.8.13

「へるんさんの秘めごと」展関連イベントとして、NHKの番組でもおなじみの浪曲師、国本武春さんをお迎えして浪曲コンサートを開催しました。浪曲とは、三味線を伴奏に物語を語る演芸の一種です。コンサートは、国本さんがリードする掛け声教室から愉快に始まり「加藤清正二条城会見」、「松山鏡」など6曲が演奏されました。三味線の刻む軽快なリズム、語りとうなりが次々と笑い感動を誘って、浪曲の魅力に触れる貴重なひとときとなりました。(MO)



【参加人数：120人】

No.038 バイオリン & ピアノデュオ ORANGE

2010.9.25

熊本県内で活動するバイオリン&ピアノデュオ ORANGE の二人によるコンサートを開催しました。ゲゲゲの女房でおなじみの曲「ありがとう」や、ジブリ作品、情熱大陸、ジブシーバイオリン曲のチャールダーシュなど、親しみのある曲が幅広く演奏されました。息の合ったピアノとバイオリンの美しいハーモニーが会場を魅了し、秋めく午後のひとときに心が色づくようなコンサートとなりました。(MO)



【参加人数：80人】

スペシャルさるく「ちょっと怖〜い話とナイトミュージアムツアー」

2010.7.24&31/8.14&21&28

「へるんさんの秘めごと」展会期中の土曜日の夜(7/21、31、8/14、21、28)に熊本国際観光コンベンション協会との協働企画「スペシャルさるく「ちょっと怖〜い話とナイトミュージアムツアー」」を開催しました。参加者の方々は怖い話を聞きながら熊本城を巡った後に、閉館後の美術館を訪れ「へるんさんの秘めごと」展を学芸員のガイド付きで観覧。話に熱心に耳を傾けつつ八雲の世界を堪能していました。(MF)

【参加人数：27人・21人・51人・79人・80人】



STREET ART PLEX KUMAMOTO 協働事業

JAZZOPEN 2010 & Great Composer Memorial Series J.S. Bach

2010.7.10&28

JAZZOPEN 2010

2010.7.10

毎年恒例となった、ストリートアートプレックス共催のジャズオープン2010。今年も中心街7箇所、ジャズセッションが盛大に行われました。美術館では、ゆみゆみ Quartet、和田いづみさん、柴田健一さん、島田恵美さんが出演、夏バテも飛んでいくような心躍るステージが繰り広げられました。(MO)

【参加人数：200人】



Great Composer Memorial Series J.S. Bach

2010.7.28

J.S.バッハの没後160年目の命日を記念してメモリアルコンサートを開催しました。出演者は、バッハを愛する子供から大人まで、ゲストには、熊本交響楽団コンサートミストレスのバイオリン奏者である鶴和美さん、マンドリン奏者の福屋篤さんをお迎えしました。平均律クラヴィーア曲集や無伴奏チェロ組曲などバッハの名曲の数々が演奏され、会場はバッハに想いを馳せながら聴き入りました。(MO)

【参加人数：120人】



アートえんにち関連ワークショップ

「めざせ!!マンガ家」キッズ編、ヤング編

2010.8.14~15



アートえんにち関連ワークショップとして「めざせ!!マンガ家」(キッズ編、ヤング編)が開催されました。井上雄彦さんのアシスタント5名から直接指導が受けられるとあって、キッズ編には100名を超える応募がありました。初めて触るGペンやスクリーントーンにとまどいつつも、実際に使用された原稿のコピーにペン入れをしていくみんなの表情は真剣そのもの。最後は出来上がった原稿とアシスタントの先生と一緒に記念撮影。ここに未来のマンガ家がいるかもしれませんね。(EZ)

【参加人数：20人・19人】

第81回 詩の朗読会

2010.8.26

第81回の詩の朗読会は、展覧会「へるんさんの秘めごと」に関連したテーマ「怪談」をもとに、10名の方が発表されました。展覧会をみたことから詩作された方、当館でも上映された映画「怪談」への見方が、年を重ねて変化したなどの気持ちを語ったもの、短歌を発表されたりと、それぞれの、「怪談」や夏の思い出を詩作・発表されていました。(HT)

【参加人数：15人】

CAMK「読みがたり」

2010.7.17&8.22

第11回

2010.7.17

開催中の小泉八雲の展覧会に合わせて、今回のテーマは「あつまれ!おばけ」でした。いつもの手遊び歌とはちょっと違う、ふるえた声で歌う『やなぎの木の下で』に子どもたちもノリノリ。黒いボードに登場人物をベタベタ貼ってお話を展開していくCAMK初のパネルシアターの演目は「のっぺらぼう」。次々と現れるのっぺらぼうに子どもたちの目は釘付け。「それはこんななおじゃなかったか〜?」の声に、さっきまで漫画を読んでいた小学3年生くらいの男の子も思わず顔を上げて見ていました。最後はカラフルで透ける布地「シフォン」を子どもたちに一つずつ配り、それを使って「ひゅうら〜」と言いながらおばけの声真似をしたり、クシュクシュと小さく手のひらに丸める手遊びも行いました。天女の羽衣みたいな布地を手に、子どもたちも楽しそうでした。(CT)

【参加人数：31人】



第12回

2010.8.22

前回に引き続き、テーマは「あつまれ!おばけ その2」でした。開始前に座布団に座って待っていてくれた子どもたちからは「ぼく、おばけぜんぜんこわくないもん!」という声もちらほら。プログラムは、大人でもギョッとするような白いお面を使って語られた『むじな』や紙芝居の『あかちゃんおばけとからかさおばけ』、好評のパネルシアターでは、食いしん坊のおばけたちが食べたものによって体の色を変えていく『あかちゃんおばけ』をお届けしました。(CT)

【参加人数：52人】



プロジェクト大山 ダンス・パフォーマンス

「ソロは苦手なんです(仮) おかげ様で、大賞頂きました ver.」

2010.8.30

5月に当館でワークショップ&パフォーマンスを行った記憶も新しい、熊本市出身の振付家・古家優里さんが、7月に行われた「トヨタ コレオグラフィ・アワード」で、「次代を担う振付家賞」を受賞されたのを記念して、凱旋パフォーマンスを行いました。古家さんと、主宰するプロジェクト大山のメンバーの松岡さんのそれぞれのソロの後、もはやCAMKではおなじみになった、ブルーと赤の衣装で、229組の中から最高賞を受賞した「キャッチ・マイ・ビーム」をベースにしたパフォーマンスが披露されました。意外にも年配のお客さまも多かった会場からも、二人の技術だけでなく、そのユーモアやダンスにかかる情熱を目の当たりにして、「変わるとなるな〜、ばってん面白かった〜!」という嬉しい声も聞かれました。今後、金沢21世紀美術館でのレジデンスや世田谷のシアタートラムでの公演を控え、ますますプロジェクト大山から目が離せなくなりそうです!(AS)

【参加人数：70人】



CAMK 人形劇「金の斧と銀の斧」

2010.8.28

夏休み終盤、アートえんにち最後のイベントとしてCAMK人形劇を開催いたしました。演目は「金の斧と銀の斧」。50名近くの子どもたちが最前列に陣取り、劇団ばれっとのお兄さんとのウォーミングアップから既に歓声が沸いていました。人形のリズムカルな動きに合わせて手拍子が起こったり、暗い森の中で音もなく下りてくるクモに悲鳴が上がったり、思わず立ち上がったしまったりする子もいたり、とても楽しい時間になりました。(CT)

【参加人数：150人】



いのちの花壇植え替え 2010.7.21

熊本養護学校の先生方と命の花壇の植え替えを行いました。この季節、花壇でいつも悩まされるのは「雑草」です。そこで今回は、しばらく除草剤をまいて、雑草を枯らし、元気な土へとリハビリさせることにしました。からからになった草を片付け、ベチュニア、ポーチュラカ、サルビア、トレニア、日草などを植え替え。ブルーと白の色味は、開催中の「へるんさんの秘めごと」展にちなみ、小泉八雲の生まれた国であるギリシャ国旗をイメージしています。(AS)

かえっこショップ

2010.8.21&22

2003年の「九州力」展で大人気を博した、アーティストの藤浩志さんプロデュースによる「かえっこ」が、再び現代美術館に帰ってきました。夏休みの家族向けイベント「アートえんにち」の一環として実施された今回は、学芸員実習中の大学生が中心になって運営。2日目に熊本バルコイイベント広場にも出張オープンし、オークションも大盛り上がりで、おもちゃを手にした子どもたちが満足そうな笑顔で帰っていくのが印象的でした。(AS)



平成 22 年度学芸員実習

2010.8.19~28

本年度は8月19日から28日のあいだの、全8日間で開催されました。実習恒例となった菊池恵楓園絵画クラブ訪問、アートキッスレターのギャラリー取材の他、今年の目玉は「かえっこショップ」の運営。1日目は藤浩志さんのアドバイスを受けながらの運営でしたが、1日目の反省点を顧みながら臨んだ2日目は、文句なしの出来栄となりました。この実習での経験が、今後の学生生活の一助となることを心より祈ります。(AS)



G III vol.72 熊本アーティスト・インデックス

2010.7.31~9.21

アーティスト・トーク

2010.7.31

ギャラリーⅢでは、熊本ゆかりの若手アーティスト 5 組（アートホーリーメン、加藤笑平、櫻井栄一、竹之下亮、ワタリドリ計画）による展覧会「熊本アーティスト・インデックス」が行われました。初日に行われたアーティスト・トークでは、自己紹介と現在の活動、そして出品作品について語っていただきました。印象的だったのは、「友だちしかこない」熊本のローカルなアートシーンを、自分たちの手で明るくしていきたい! と語る言葉。その真摯な姿勢が心に響きました。また、竹之下亮と加藤笑平によるパフォーマンスも行われ、盛況のオープニングとなりました。(AS)



【参加人数：トーク 40 人 パフォーマンス 60 人】

ワタリドリ計画「旅の絵はがきワークショップ」

2010.8.1

「熊本アーティスト・インデックス」展に出品するワタリドリ計画（武内明子・麻生知子）と一緒に、新町古町地区の古い町屋を訪ねて写真を撮り、「旅の絵はがき」を作るワークショップを行いました。まずは、新町古町町屋研究会の皆さんの案内で、新町地区と古町地区に分かれて町歩き。知らない話をいっぱい聞きながら、楽しく写真を撮ります。その後、写真をモノクロでプリントアウトして、油絵具で自分の好きな色に着彩していくと…あら不思議、さっき通った道がもう思い出の中の風景のような、素敵な色合いに。最後は、おやつのスイカでのんびりし、夏の日よい思い出になりました。(AS)



【参加人数：20 人】

竹之下亮ダンス・ワークショップ & パフォーマンス

2010.9.4

ギャラリーⅢ「熊本アーティスト・インデックス」展の参加作家、竹之下亮によるワークショップとパフォーマンスが行われました。午前中のワークショップでは、じっくりストレッチやほくしをした後、お尻、ひじ、足の順で、それぞれの文字をあてっくするゲームを行いました。ひじや足、お尻を動かすとあら不思議、「舞踏」のような動きになっているのが新鮮。午後は、このパフォーマンスのために、5月から練習を重ねてきたメンバーと一緒に「つながり」をテーマにしたダンスの発表。こどもからベテランまで、真剣に、ときにくすりとさせながらダンスが続きます。そして最後は、坂本九の曲にあわせ、お客様もステージにあがって、老いも若きも大きなダンスの輪が！ダンスって、楽しい！ということを実感させられるパフォーマンスでした。(AS)



【参加人数：ワークショップ 12 人 パフォーマンス 70 人】

世田谷美術館・長崎県美術館と合同でボランティア交流会を行いました！

2010.9.2

世田谷美術館 28 名、長崎県美術館 18 名のボランティアの皆様を当館にお招きして、3 館合同によるボランティア交流会を行いました。まずは、各館のボランティアさんの活動内容を紹介。展覧会活動、立地性、地域との連携性、教育普及のありかたなど美術館それぞれの特質に合わせた多様な活動が行われており、ボランティアの皆さんも興味深く聞き入っておられる様子。その後の意見交換会では、各館のボランティアさん、美術館スタッフから熱心な質問がされ、貴重なお話を聞く素晴らしい機会となりました。最後に記念写真をパチリ。ちなみに、後の横断幕は、CAMKEES の加藤さんがお書きくださいました！

その後は、CAMKEES の案内のもと 2 館の皆さんに館内を見学していただき、カフェ・レガールで懇親会。19 時にピアノボランティアさんによるホームギャラリーでの演奏が始まると、皆さん自然にホームギャラリーに向かわれ、音楽を楽しまれていました。最後は、ホームギャラリーの天井にあるジェームス・タレルの《ミルク・ラン・スカイ 2002》を全員で鑑賞。19 時半から作品の色が変わることをご存知でしたか？夜の帳がおりるように、作品の色が微妙に変化することで幻想的な空間が生み出されておられました。皆さん、静かに作品に酔いしれておられました。他館のボランティアさんと交流を深めながら、お互いに刺激を受ける充実した交流会となりました。(AA)



ART de Gyan!

[アート・ド・ギャン]

熊本弁で「アート、どう？」の意です

今号は、学芸員実習生のみなさんが、ギャラリー取材にトライしました。執筆者は以下の通りです。

池田雅 (M.I)、江藤由衣 (Y.E)
河喜多祐佳 (Y.K)、小西あゆみ (A.K)
櫻井里菜 (R.S)、田邊のぞみ (N.T)
槻木彩乃 (A.T)、野田千尋 (C.N)
橋爪実莉 (Ma.H)、本田美穂 (Mi.H)
松隈知子 (T.M)、山口あゆみ (A.Y)

ファッショナブルな虫達 昆虫標本より

2010.8.18 - 8.29 島田美術館ギャラリー 熊本県熊本市島崎 4-5-28 096-352-4597

会場には、無条件に飛び込める色鮮やかな世が広がる。島田美術館の一角では「ファッショナブルな虫達」と題された展覧会が開催された。昆虫標本が数多く展示され、虫をモチーフにしたかわいい作品たちが、顔を覗かせている。標本は作家のいない作品であり、自然の生き物達のありのままの姿に心打つ感動を覚えると、今回の展示を企画した島田有子さん。「普段賞しギャラリーとして展示している作品と同様にあまりじっくり見る機会がなく、しかし身近に居る虫達の姿を見つめることで虫の悲愴のない生き方や自然界にあるもの美しさに目を向けることの大切さを感じてほしい。」一人のお客として楽しめる展示をすることで、他の人にも楽しんでもらえる喜びを求めて、企画展をしているということだった。標本という、生きているものとは違い、一種の恐ろしさを感じることもあるが、ここにある虫達は、その装飾性に目を奪われる。本展の標本は、三宅純男さんのコレクションだ。三宅さんの虫の世界が一つ分かったら、もっと多くの謎が見つかり、それをまた1ずつ分かるうとして、のめり込んでいく謙虚な姿勢が伺えた。(N.T) (M.I)

内野敏子水引教室展

2010.8.24-8.29 熊本県伝統工芸館 熊本県熊本市千葉城町3-35 096-324-4930

熊本市二本木でクラフトショップ兼ギャラリーを営みながら作家活動を行う内野敏子さんによる水引教室の作品展。30代～60代までの生徒さんの作品が明るい展示室に並び、90秒という限られた長さの水引で制作されており、モチーフは鶴や亀など伝統的なものから着置きや籠などの日常的なものまで多岐に渡る。中でも山下ゆみこさんの白い籠の作品達は、シンプルであるが故に形の繊細さが際だって美しい。ワークショップも随時行われており、水引を身近に感じることができると好評である。(Y.K) (A.Y)



山下ゆみこさんの作品

竜元窯 親子展

2010.8.24-8.29 熊本県伝統工芸館
熊本県熊本市千葉城町3-35 096-324-4930

高田焼竜元窯を営む江上元さんとその息子さんの晋さんによる親子展が開催されていた。お父さんの元さんは24年前に八代郡氷川町で独立した。現在では、土づくりをされている奥さんを含めた3人で、青磁を基調とした白黒の象嵌技法を用いた器や花器の制作を続けている。元さんの「焼締象嵌花瓶」では、ご夫婦で奄美大島に旅行に行った際に見つけた崖薔薇がモチーフになっている。息子さんの晋さんの「青磁象嵌花器」では、ストライプを用いた抽象的なデザインになっている。2人の作風には違いが見られる。元さんは白黒グレーの少ない色調で南国の花を表現されていて、派手なものをつくらぬというこだわりを感じた。晋さんは白黒の抽象的なデザインであったが、花を引き立てるような温かみのある繊細な印象を受けた。元さんは、晋さんが新しいデザインを取り入れたり、積極的に展覧会を行う姿を温かく見守っている。晋さんは今後の抱負を「時代に合わせたその時々々の生活空間に合った表現を目指したい」と語る。400年の伝統がある高田焼を今後発展させていきたいという思いが感じられた。(T.M) (A.K)



江上元さんの焼締象嵌花瓶

～輝く光の中で～第12回アポア会展

2010.8.24-8.29 熊本県立美術館分館
熊本県熊本市千葉城町2 096-351-8411

熊本県薬剤師会美術同好会の13名によるグループ展。年に一度、県内の薬剤師が趣味で制作した絵画などを持ち寄り展示している。アポアとはドイツ語の「薬剤師」に由来し、元薬剤師で現在は画家として活動している洋川光行さんがこの会の発端である。作品は油彩画・水彩画・写真など様々で、描かれているものにも決まったテーマは無く、各々が自由に制作したものだ。例えば石田浩子さんの作品は、はにかむ姿が素敵な少年ゴルファーを描き、そのタイトルを《王子》としている。薬剤師という堅いイメージを持ちがちだが、このようなユーモアのある作品もあるのが驚かされた。また、同じ作者なのに、作風が全く異なり感心する作品もあった。現在、同好会の年齢層が高いため、若い世代の参加が今後の課題だそう。来年は5月に同会場で第13回アポア会展が行われる予定である。この機会に彼らの多種多様な作品を見に行かれてはどうだろうか。(R.S) (Mi.H)



石田浩子さんの《王子》

青い海のお散歩

2010.8.21 - 8.29 イクイメントフロア
熊本県南坪井 7-17 096-323-1197

熊本デザイン専門学校卒業のソノダミさんとヨシダハルカさんのユニットchime (チャイム) による作品展。ソノダさんの描くイラストを手書き友禅・型友禅の技法を用いてヨシダさんが命を吹き込む。伝統的な友禅染めの技法と20代の若い感性が見事に調和している。カフェに入ると、暑さを忘れさせるような「青い青い大きな海」がまず目に入る。魚たちにもまれる、まるで海の中を散歩しているような爽やかでカラフルな作品が並び、今後もこの若い2人の活動に注目したい。(Ma.H) (A.T)



ラッサナ LANKA 展

2010.8.24-8.22 崇城大学ギャラリー
熊本県市花畑町10-25 096-323-1158

崇城大学芸術学部の有志によるスリランカを紹介する展覧会。ラッサナはスリランカの現地語で「美しい」という意味で、LANKAはスリランカのこと。スリランカのキャラニア大学との交流の一環 heART project で昨年学生13名が現地に滞在した。このプロジェクトは、「スリランカの子供達とアートで触れ合おう」というもので、大学で画材提供を募り、現地の子供達とワークショップを行った。その背景には津波の被害に遭った子供達と粘土遊びや絵を通してアートをする喜びを分かち合おうという思いがある。会場ではその学生と子供達の様子がパネルで展示されており、後半には学生が帰国後制作した作品も展示されている。藤吉美里さんの《嵐風の記憶》は、現地の海や空を想起させる綺麗な青が印象的な絵画作品だ。その他スリランカの自然や動物、仏教美術等の写真や絵画からスリランカに訪れたことのない私達にもその美しさや大きさ伝わってきた。(Y.E) (C.N)



第22回 熊本県シルバー作品展

2010.8.17 - 8.22 熊本県立美術館分館
熊本県熊本市千葉城町2 096-351-8411

熊本県や熊本さわやか長寿財団等が主催するアマチュアの公募展である。高齢者の生きがいづくりを目的に毎年開催されて22回目である。日本画、洋画、写真、書、彫刻、工芸の6部門に60歳以上の380点が出品され、今年は67点が入賞していた。会場には異沙門天像や国重要文化財である多良木の青蓮寺の彫刻作品等、丹精込めた力作が多く、本物そっくりですばらしいと見る人も驚いていた。最高齢98歳の古田みどりさんのちぎり絵はコスモスの花にトンボを配した構成もうまく、明るい作品には感心させられた。又この作品展は観る人も多く、会場は人がとぎれることがなかった。(S.K)



第38回 硯心展

2010.8.25 - 8.30 アートスペース大宝堂
熊本県熊本市上通町5-6 096-354-2155

熊本大学書道部の卒業生を中心としたグループ展で硯心会(上田桂峯会長)という。自分の思いを言葉や詩書で50名が一人一点を展示していた。斎藤鶴跡(元熊本大学教授)さんは白居易の小楷(小さい楷書体)で丁寧で品よく示していた。米村晴雨さんは最高齢(90才)で卒意の書を自然体で見せていた。平田抱山さんは「古くて新しいものは永遠なり」と「古意今用」と面白く表現している。徳永崇鶴さんの「越」の大字は実力のある用筆で淡墨が美しい。森山淡草さんは「道に傾う」を金文で面白く構成も素晴らしい表現である。川崎彦舟さんの「寒巖一樹の松」や三嶋天満の「魔」、大久保倫子の「かな」が目に残った。(S.K)



SUITTÖ KUMAMOTO

CAMKフレンドインタビュー

*今年度は熊本の次世代文化を支える人々をご紹介します。

[スイット・クマモト]

熊本を中心に、イベント企画、番組制作、人材派遣など幅広く手掛ける株式会社 桃 MOMO の浜島玲恵さんに、熊本を元気にする秘訣をお聞きました。



株式会社 桃 MOMO
代表取締役 浜島玲恵さん

会社を立ち上げたきっかけは—

20代の頃は熊本市内の制作プロダクションに勤めていて、ラジオ番組の制作やイベント・プロモーションに携わっていました。東京、大阪、横浜、福岡にも支社がある会社で、九州各県に次々とFM局が開局していた時期だったので、全国各地を飛び回って仕事をしていました。けれど、IT化の時代の流れの中「このままでいいのかな」と自分自身の環境を変えてみたくて30歳で退社。フリーランスの立場で仕事をするようになりました。その当時、ハンドボールの世界大会や「くまもと未来国体」などの開催が決まっていたので、運良くそれらのプロジェクトの中で仕事をする事ができ、勉強にもなったし、楽しかったんですが、他にもラジオ番組やイベントのレギュラーを抱えていたため、あまりにも忙しくて一人では限界があることを実感したんです。そんなある日、仕事の基礎をたたき込んでくれた恩師が急逝してしまい「残された自分は何をすべきか」と考えた結果、自分が与えてもらったもの活かし、人と人を結んでいくことで世の中の役に立てることがあるのではないかと会社をつくる決意をしました。実際の仕事では苦勞の連続ですが、自分たちが思い描いたことが形となって表れたときは苦勞に勝る喜びがあります。

どんな熊本にしていきたいか、ビジョンはありますか—

そんなに大きなビジョンはないのですが(笑) 熊本は九州新幹線も来年全線開業するし、政令指定都市になることも決まっている。今こんなにいるんなことが動いている地方都市はないですね。様々な立場の人達がそれぞれの場所で熊本をもっと元気にしていこう、みたいな動きがはじまっている。それらが繋がっていくと、もっと大きなうねりになって、より魅力的でパワーある熊本になると思うんです。それぞれに動いているものを繋いでいって化学反応を起こし、新しいモノ、仕組みを作っていけたらいいなって思います。

美術館にメッセージを—

今の世の中、政権交代や資本主義の限界など、目まぐるしい価値観の変化の中で、アートの持つ力は重要だと思っています。当たり前だった事が当たり前じゃない、当たり前って何だろうと疑ってみる。現代美術館はそういうヒントを与えてくれるところで、今の場所に美術館がある事はとても意味のあることだと思っています。「今回はこう来たか、これもアートなんだ」とか「この作品はこういう意図でこうなっているのかな」など自分なりに考えを巡らすことができるのは幸せなことです。これからも多彩なアーティストや作品を紹介して欲しいし、喜びや刺激を与えて続けて欲しいですね。

VISITOR'S LETTER

[来館者のみなさんからのメッセージ]

アンケートに寄せられた感想(抜粋)をご紹介します。

へるんさんの秘めごと展

- へるんさんの伝えたい日本の「美」が伝わってきた。(10代、熊本県内、男性)
- ラフカディオ・ハーンがなぜ小泉八雲という名前だったのか、なぜへるんさんと呼ばれていたのか気になっていました。激動の人生を歩んでいらしかったことがわかり、また熊本を愛していたことも知る事ができて身近に感じるようになりました。(40代、熊本市内、女性)
- 展示替えのために、月岡芳年の版画が観られず残念でした。展示の中にあっただ、新聞に絵付きのアルファベットのつづりの練習。へるんさんの子供に対する愛情がほほえましいです。(40代、熊本市内、女性)
- 作品に思ったよりもずっと温かさがあった。(20代、熊本市内、女性)
- 熊本にゆかりのある方の展覧会はとても興味が湧くし、親近感もあるのでこれからもどんどん開催して欲しいと思います。(30代、熊本市内、女性)

編集後記

日に日に秋が深まり、ぶどうや栗の美味しい季節がやってきました。オクトーバー・フェストやボジョレー・ヌーヴォー解禁など、ヨーロッパの秋の味覚の多様さも、大人になってから知る楽しみのひとつですね。現在開催中の古屋誠一展、サイコアナリシス展も、大人だけが感じ入ることのできる側面を大いに含む展覧会です。ぜひ、秋の夜長を美術館でお楽しみください。

編集長 富澤治子

気がつくとも衣替えの季節ですね。猛暑が永遠のように感じられた今年の夏、移りゆく季節をしみじみと感じる昨今です。思い起こせば今年の夏はキャンク初の試みとなる「アートえんにち」を開催、様々なイベントを行いました。中でもかえっこショップでは、大人も童心に返っておもちゃに夢中になる姿がなんだかとっても熱かったです。いい夏の思い出になったでしょうか。さあ夏も終わり美術館でも衣替えです。秋の展覧会をごゆっくりとお楽しみください。

担当 大岩みゆき

- 発行元/ART KISS LETTER アート・キッス・レター Vol.49 2011年11月発行(秋号) ◎無料◎
- 発行人/桜井 武 編集/富澤治子、大岩みゆき
- デザイン/(有)松永 壮デザイン事務所 ●印刷/シモダ印刷
- 発行/熊本市現代美術館 〒860-0845熊本市上通町2-3 TEL.096-278-7500 FAX.096-359-7892

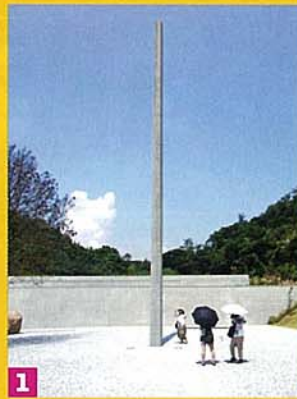
●執筆者一覧
*ギャラリー取材原稿の文末にイニシャルにて記載しております。

- 兼城昌山
Syozan Kaneshiro (書道家)
- 本田代志子
Yoshiko Honda (熊本市現代美術館主任学芸員)
- 織座江美
Emi Zoza (熊本市現代美術館学芸員)
- 富澤治子
Haruko Tomisawa (熊本市現代美術館学芸員)
- 坂本頤子
Akiko Sakamoto (熊本市現代美術館学芸員)
- 芦田彩菜
Aki Ashida (熊本市現代美術館学芸員)
- 矢加部咲
Saki Yakabe (熊本市現代美術館学芸アシスタント)
- 大岩みゆき
Miyuki Oiwa (熊本市現代美術館学芸アシスタント)
- 藤本真帆
Maho Fujimoto (熊本市現代美術館学芸アシスタント)
- 高橋知江
Chie Takahashi (熊本市現代美術館学芸アシスタント)

WORLD NEWS

誰でも！アートな旅のススメ

—2010年夏、暑かったんです。『瀬戸内国際芸術祭2010』レポート—



1



2



3

今回で紹介するのは、毎年日本各地で行われている芸術祭の中で、今夏、最も話題を呼んでいる『瀬戸内国際芸術祭2010』である。しかし、このレポートは芸術祭の批評や作品の良し悪しを語るものではなく、「芸術祭ねえ…。どうせなら南の島に行きたいわ」というリゾート派の方や、「行ってみたいけど行き方がよく分からないし、お金もない…」という学生さん、はたまた「芸術祭…??瀬戸内海といえば『二十四の瞳』だね」という文学・映画愛好家へ送る、アートと島と旅の、気軽に庶民派な楽しみ方のご提案である。実際、これを書く筆者も、仕事柄現代アートにとっぷり関わっているもの、お金も時間も余裕があるかといえそうでもない、なんだかんだと忙しい社会人である。が、しかし、そこに島がある限り、行かずにはいられないのが筆者の性で、どうせ行くなら楽しまなきゃ損、というのがこのレポートの起点となっているのである。

まずは、熊本から瀬戸内への旅程を簡単にご紹介。JR では、熊本から博多まで、新幹線で岡山へ。そして再度乗り換え高松へ、という道程となる。所用時間は5時間程度、新幹線・特急を使っても費用は片道¥15,000-程と、少々高めである。しかし、お金も時間も無い、がテーマのこの旅行。そこで選ばれたのが高速バスであった（ちなみに熊本⇔博多間は日中の高速バス、博多⇔高松間は夜行バスが出ている。片道¥10,000-程と比較的安く、夜移動のため時間も宿泊代も節約可能となる。

さあ、それではいよいよアートな旅の始まりである。熊本を夕方に出て、博多へと向かう。21時過ぎに博多を出発する夜行バスが高松駅に着いたのは翌朝8時前であった。女子の悩みでもある足のむくみが少々気になるが、エア枕を持参したおかげか、車中では熟睡。体の痛みも思ったほどにはなく、足取り軽く高松駅に降り立った。制限時間はこの朝から翌日の夜、高松発のバスに乗るまでの丸2日である。芸術祭の舞台の中心は、瀬戸内海に浮かぶ7つの島（直島・豊島・女木島・男木島・小豆島・大島・犬島）と1つの港（高松）である。それぞれの島や港に設置された、島固有の文化、生活、歴史に根差した現代アートの作品を道しるべに、島と島の間は船で、島内はバスやレンタサイクル、徒歩などで巡っていく。ペース配分としては、作品数や島の大きさにも寄るが、船での移動を考慮すると、1日1〜2島が現実的である。スケジュールを詰め込んでも船やバスの時間が合わないこともあるし、作品を楽しむための時間は制限しない方がいい。

さて、「夏・海・島」という傍から聞くと大変爽やかなキーワードに反して、実際の炎天下の島巡りは想像以上に暑かった。そして、熱かった。どの島でも常に時刻表と睨めっこしながら、バスと船を使って綱渡りするように島から島へ、作品から作品へと渡り歩く（写真1,2,3）。しかし、そんな炎天下の道を、鉄板の上の食材のごとくじりじり焦がされながら歩くのも、また一興である（女子の日焼け対策は必須）。きつい日差しを避けてひと休みする木陰、高速船で頬に感じる潮風、目に写るのどかな島の風景は、暑さと相まって島に降り立つ人間のデンションを否が応でも上げていくのだ。

そんな暑い島巡りの中で出会ったたくさんの作品の中から、アート好きもアート初心者も楽しめるであろう体験型の現代アート作品を、爽やかに重視していくご紹介しよう。

まずは、20年以上前からアートプロジェクトが進められ、全国的にもアートの島として知られる直島にある、一風変わった銭湯のご紹介である。その名も大竹伸朗 / graf の直島銭湯（「♥湯」）（写真4）。現代アートは説明があれば分かるんだけど…という方もいるかと思うが、この作品に関しては心配ご無用である。なぜなら、これは「作品鑑賞＝銭湯に入る」ことだからである。そう、島中の作品を巡って溜まった旅の疲れや、日常の垢にまみれた身体、考えすぎて疲れた頭を一風呂あびて癒したい、そんなワタシたちの願いを叶えてくれるのがこの作品なのである。近所があったら子どもたちの噂の的であろうと派手な存在感溢れる外観の建物の入り口へと続く順番待ちの列に並び、販売機で入湯券とタオルを購入。懐かしの下足箱に靴を入れたら番台さんにチケットを渡し中に入る。脱衣所から浴室へと歩を進めれば、巨大な象の置物と窓の向こうに見える植物の温室、そして海女が描かれたタイル画が目飛び込んでくる。水道の前に座ればシャワーの蛇口も特別製、昔懐かし黄色の洗い桶には「♥湯」の文字が。不思議な音楽に気を取られながら湯船につかり、ほうっと天井を見上げれば太陽光が透過する色鮮やかな天井、「アイラブユー♥」と思わず呟いたのは、きっと筆者だけではない。そんな、現代アートと裸で付き合える大竹伸朗ワールドがアナタを待っている。次に、7つの島の中で最も広い面積を持つ豊島から、日本の夏を思わせる作品をご紹介します。シャネット・カーティフ & ジョージ・ビュレス・ミラーの《スチーム・ハウス》である。作品は一見何の変哲もない古民家。暗い入口から中に入ると、二間続きの畳の部屋に通される。畳に座って一時すると、雨音が聞こえ始め、窓を雨粒が流れ始める。徐々に雨音が

強まり、部屋の電球がちかちかと明滅し、停電する。稲妻がガラス越しに光り、轟音が響き渡り、窓へ打ち付ける雨は滝のようだ。その後ピークを迎えた嵐は、徐々にその勢いを弱め、雷の音が遠ざかるとともに雨が弱まり静かな日常が戻ってくる。この間、約10分。自然の脅威を体感した後の静謐な解放感、幼い頃、台風に怯えながらもどこかワクワクしたあの頃の気持ち、そして過ぎ去った後の清々しさを思い出させてくれる。作品の家屋を出て上を見あげると快晴の空。自分だけの「台風一過」に、爽快な笑いが込み上げる。また、お昼時を楽しむならこの近くにある芸術祭関連企画「島キッチン」がおススメだ。古民家を改築したレストランの縁側で食べるキーマカレーにはビールがよく合う。大人の休日には欠かせない小さな幸せである。おすすめ作品をふたつほど書き綴ってきたが、これから先は、ぜひあなたの目で、耳で、皮膚で、舌で感じてほしい。島好きの方も、アート好きの方も、そうでない方も、少しでも興味があれば、まず日本地図を広げてほしい。地図を見ながら瀬戸内海の島々へ思いを馳せれば、そこからあなたのアートな旅は始まるのである。（S.Y）



4

1 作品めぐりに帽子と日傘は必須

2 作品の中には島が一望できる展望台も…!

3 直島のシンボル、草間彌生（赤かぼちゃ）を目指す人々

4 直島銭湯（♥湯）にて、炎天下の入湯待ち

『瀬戸内国際芸術祭2010』詳細

正式名称：瀬戸内国際芸術祭「アートと海を巡る百日間の冒険」
開催期間：2010年7月19日（海の日）～10月31日（日）
会場：直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島、高松港周辺
参加作家：18の国と地域から75組のアーティスト、プロジェクト、16のイベントが参加

※芸術祭の会期終了後も、引き続き鑑賞することができる作品もあります。詳しくは、瀬戸内国際芸術祭総合インフォメーションまでお問い合わせください。尚、直島銭湯（♥湯）は会期終了後も営業しています。

ホームギャラリーからのお便り vol.3

LETTER FROM HOME GALLERY

本棚の中に…

ホームギャラリーの本棚の中をよく見てみると実は2つの作品があります。今回はその作品についてご紹介いたします。本棚の中に卵?とびっくりするかもしれませんが、これが一つ目の作品、韓国の作家ユック・クンビョン作の《The Sound of Landscape+Eye for feel=Silent Eye》です。9個の卵の中には9ヶ月になる赤ちゃんがすやすやと眠る顔が映し出されています。本棚の本がみなさんの手に取られるまですやすやと眠って待っている様子を思い描いて作られました。この作品は日本、韓国、ベトナムなど各国の赤ちゃんが映し出されています。本棚の本を探しているときに、なにか気配を感じるなあとと思ったらそれが二つ目の作品、篠内 佐斗司(やぶうち さとし)作の《本読み童子》です。本の間できちんと正座をして真剣に本を読む姿には思わず微笑んでしまいます。どの本を読もうかなと探すときに、4人の童子がどこにいるかぜひ見つけてください。(E)

